



小学生の野球に携わって学んだこと

— その1 信頼こそ指導者の資格 —

三浦捷也

(三浦歯科医院 院長)

「子どもの問題行動」や「凶悪事件」の背景には、子どもの育つ過程における「家庭」と「周囲の大人」が深く関わっている。つまり、「荒れる源」は大人社会にある。「大人が変わらなければ、子どもは変わらない。子どもが変わらなければ、次の時代は変わらない。」という信念のもと、私は40年間、小学生の野球に携わってきた。

野球を通して子どもたちと真っ正面から向き合い、「子どもには、大人に見えない世界がある」ことを学び、改めて子どもたちのことを知り、大人としての有様を学ぶことになった。

これまで折に触れ、秋田魁新報の「対話・会話」の欄に問題提起として投稿、三冊の著書も上梓した(・少年たちへの応援歌、・少年スポーツと教育の未来、・どの子にも生きる喜びと勇気)。その中から、子どもたちとの体験を通して、特に伝えたいことを整理・加筆し、「あきた経済 コラム欄」に今後数回に分け、ご報告させて頂くことにした。僭越の謗りは免れないが、私の体験が少しでも、皆様の参考になれば嬉しく思う。

— 信頼こそ指導者の資格 —

私はこれまで、馬齢を重ね、80歳を迎えた。反省することの方が多いが、それでも長年、純粹でかわいい子どもたちとの野球指導に携わり、また障害を持つ子どもたちの歯科診療を通して、

多くのことを学んだ。最近になり、孫たちの成長や活動を身近で観察し、今になって、子どもたちの伝えたがっていること、褒めてほしいと思っていることなど、子どもの心の奥にある願いや叫びなども少しは感じとれるようになった。

私は小学生の心とからだについての認識はある程度持っていたつもりだったが、グラウンドで実際に団員と触れてみると、「聞くと見るとは大違い」というのが率直な印象である。

小学生は運動能力のある子ども、運動が苦手な子ども、腕白な子ども、内気な子ども、野球の練習よりも、小鳥やグラウンドの草木や花に殊のほか興味を示す子どもなど様々だが、でも、どの子も一様に、友だちと自由に動き回ることには大好きである。

多くの子どもは繊細で、弱い心を持っているが、その反面、個性豊かで、独創を持ち、何事にも挑戦する強い心をも併せ持っている。また、子どもたちは、自分自身の強さ、弱さ、立場をもわきまえ、そのうえで常に斜に構え、大人たちを鋭く観察している。練習中、様々な思いを持った子どもたちの鋭い視線や問いかけに、思わず立ちすくんでしまうことも度々体験してきた。

団員と接するようになってしばらくすると、「大人はあまり信用できないが、理事長(当時、子どもたちは私のことを理事長と呼んでいた)なら僕たちのことをわかってくれそうだから仲



間に入れてやるよ。」子どもたちの殊勝な気遣いを肌で感じるようになった。立場の違いや、爺さんと孫のような年齢差があっても、お互いが誰に気兼ねすることもなく、大好きな野球を楽しんできた。

練習中、団員のA君に「今日はいつものような元気がないが、どうした、風邪か？」と心配して声を掛けると、A君は「いま僕たちは、学校の他に、塾通いで忙しい。結構大変なんだ。理事長にはわからないだろう。」と生意気に答える。そこで、「たまには塾をサボってみたら？」と茶化してみると、その子どもは、頭に両手の人差し指で「鬼の角」をつくり、「お母さんがこわい」と心の内を明かしてくれた。

練習中の会話や表情から、子どもたちは大人の顔色を伺い、気を遣い、両親にも学校の先生にも、本当の素顔を見せていないと感じることもある。それにしても、大人に不信感を抱いている子どもの多いのに驚く。

その一方で、練習を通して団員と触れ、語り、共に胸襟を開き汗を流していると、コーチ達と団員との間に信頼し合える不思議な「空間」や「風」を感じることもある。普段、素顔を見せない団員でも、この「信頼の風」を実感すると、どの団員も自分をさらけ出し、一気にあどけない、無邪気な小学生に戻る。そしてグラウンド一杯に、子どもたちの明るく、屈託のない笑顔が広がる。

練習では、コーチと団員との信頼関係をより深くすることと、子どもの将来にとって不可欠な資質である「自主性・主体性・判断力」を伸ばす目的で、基本的には保護者の練習への見学を禁止している。親が子どもに寄り添い、子どもの近くで声援を送ることが当たり前の現状で

は、こうした対応は異例と思われているが、本来、子どものスポーツも遊びも、子どもだけの世界だから楽しいので、「大人に管理され、大人を気にしながら遊ぶことなど、楽しいはずがない」ことへの私のこだわりでもある。

小学生との野球と携わり、多くのことを学んだが、なかでも、子どもに接するうえで、「大人と子どもの信頼」が必須の条件という印象を強く抱くようになった。

団員のなかには、生まれてずっと、「自分の良さを認めてくれない親」、「自分の考えを押しつける親」などへのある種、憎しみのような感情を抱いているのではないかと思える子どもにも出会う。

いくら子どもの前で、「愛している」、「あなたのことを思っている」と美辞麗句を並べてみても、親が子どもの持つ、独自の良さを認めなければ、子どもは大人を観察する鋭い嗅覚を持っているので、すぐ感じとる。ほんの少しでも、大人がその子の個性や良さを探す努力をし、それを認め、評価し、褒めてやれば、子どもたちは目を輝かせ、元気になることをたっぷりと体験した。子どもたちにとって最も大切なことは「大人に認められ、信頼される」ことのようなのだ。

大人が子どもに信頼されるには、まず、大人自身が率先して、子どもを信頼することから始めなければならないことは言うまでもない。

子どもは誰も皆、「自分らしく生きたい、幸せになりたい」ことへの淡い夢を抱いている。その思いをいかに伸ばしてやるかが大人の役割である。子どもがどのような状況にあろうとも、とことんどこまでも信じ、「子どもの存在価値」を認めてやるのが大切なのだろう。

子どもとの信頼こそが、指導者の資格である。